アマチュアオーケストラ

新交響楽団第120回演奏会

指揮□山田　一雄

独唱□伊原　直子*

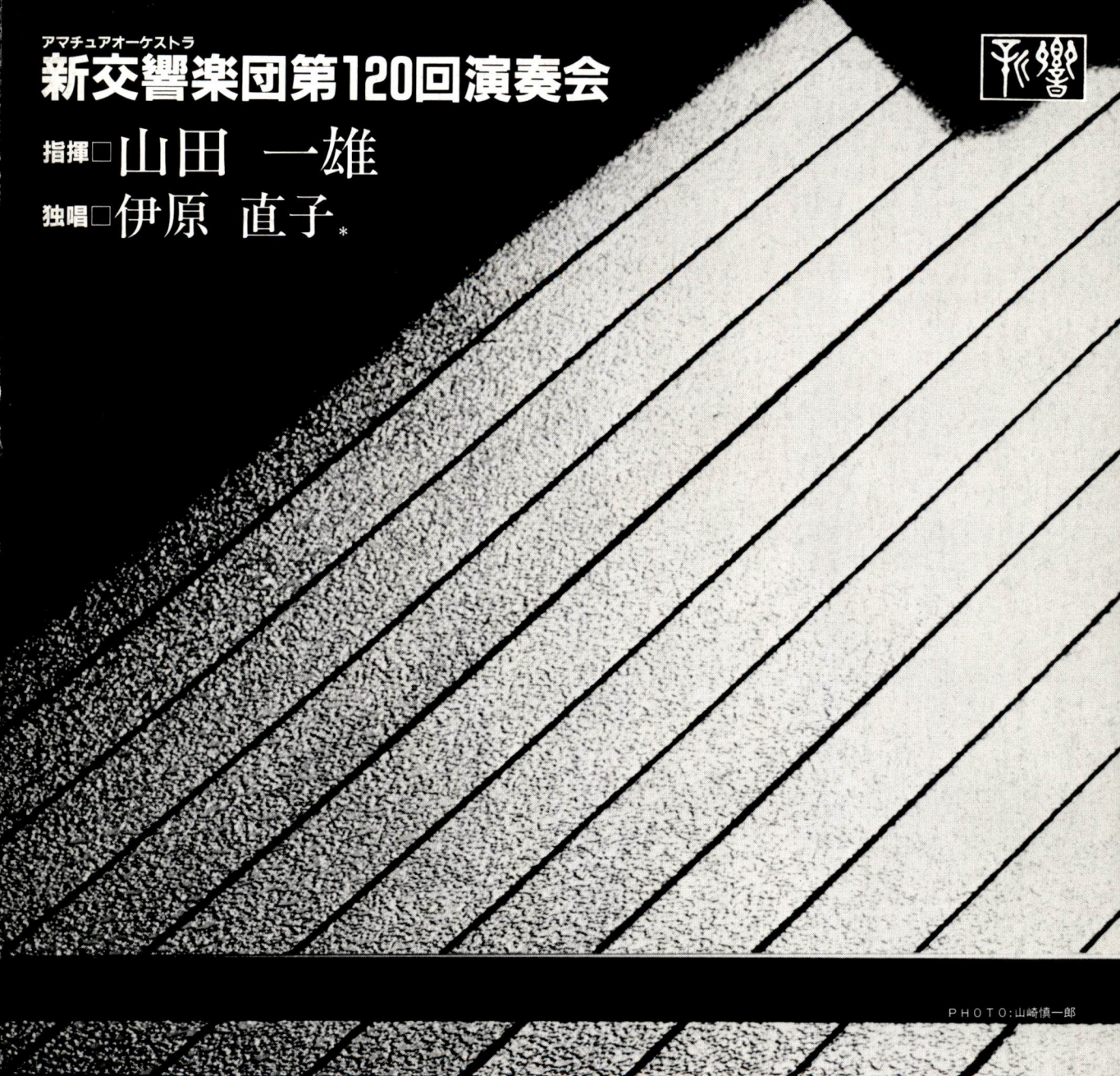


PHOTO:山崎慎一郎

GUSTAV MAHLER

新響マーラーシリーズ 11

交響曲第9番ニ長調第4楽章・アダージョ

Symphonie Nr.9 D-dur 4.Satz Adagio 1909

さすらう若人の歌*

Lieder eines fahrenden Gesellen 1884

交響曲第1番ニ長調

Symphonie Nr.1 D-dur 1888

1988 7.31(日)2:00 p.m.

サントリーホール

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第120回演奏会——マーラーシリーズ 11

グスタフ・マーラー
Gustav Mahler

交響曲第9番ニ長調第4楽章アダージョ*
Symphonie Nr.9 D-dur 4. Satz Adagio 1909

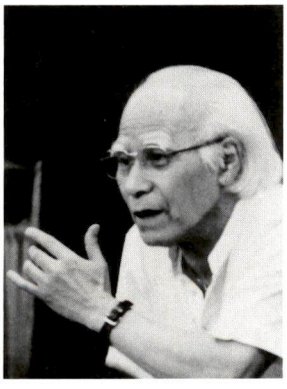
—— 休　憩 ——

さすらう若人の歌
Lieder eines fahrenden Gesellen 1884
独唱●伊原直子

交響曲第1番ニ長調
Symphonie Nr.1 D-dur 1888

1988年7月31日(日)2：00 p.m.
サントリーホール
主催：新交響楽団

*前回の演奏会プログラムにて第1曲目をバッハ「シンフォニア」と予告いたしましたが、「新響マーラーシリーズ」の実現にあたって大きな功績のあった当団コントラバス奏者・故橋谷幸男氏が4月24日亡くなりましたので、追悼のために曲目を変更させていただきました。



山田　一雄

1912年東京生まれ。1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞1等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団（現N響）補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第8番、ストラヴィンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。

76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。



伊原　直子

東京芸術大学卒業。同大学院修了。戸田敏子、中山悌一に師事。1967年、安宅賞を受賞。1969年、ワーグナーの「ラインの黄金」のエルダでオペラにデビュー。N響、日フィル、読響その他主要オーケストラと協演し、コンサートの分野でも高い評価を得る。1971年、西独政府給費留学生としてミュンヘン音楽大学に留学し、E. ヘフリガーに師事。1975年、フランスのラインオペラと専属契約を結び、「カルメン」「ジークフリート」その他に出演。またコンサートでも「復活」や「マタイ受難曲」等、数多くを歌っている。1980年、第8回ウィンナワールト・オペラ賞大賞を受賞。その後もフランス、ベルギーで活躍し、1981年に帰国。レコードではエラート、バークレー、キングの各社からバッハのカンタータ、「ヘンゼルとグレーテル」「中田喜直歌曲集」などを出している。新響とはマーラー「交響曲第3番」で共演した。二期会会員。

●アラーム付時計をお持ちの方はアラーム・時報の解除をお確かめ下さい。

交響曲第９番

岩城　正昭

マーラーはその生涯に11曲の交響曲を作曲した（１曲は未完）。11曲のうちには番外の交響曲「大地の歌」が含まれているため、「交響曲第９番ニ長調」は実際には10番目の交響曲であり、完成された最後の交響曲である。曲は４つの楽章からなるが、本日の演奏会ではそのうちの第４楽章「アダージョ」のみを演奏する。

マーラーはボヘミアにユダヤ人として生まれ、生涯の大部分をウィーンで過ごした。ウィーンの宮廷歌劇場の芸術監督として功成り名遂げたのち、一時的に渡米するが、第９交響曲はそれと前後して手がけられ、1910年アメリカで完成された。翌1911年、マーラーは病身をおしてウィーンに戻り死去する。

マーラーの交響曲は一般に難解であるという印象を持たれている。古典派から続いてきたドイツ音楽の伝統的形式が崩壊する一つのきっかけは確かにマーラーであった。そしてマーラー自身の交響曲作曲の流れを追ってみても、曲の長大化、楽章数の増加、声楽の導入など、常識破りの曲を作り続けた末に行きついた先が第９交響曲であり、マーラーの交響曲の中でも第７番と並んで難解とされるのも自然である。

しかし一旦そのような先入観を取り払ってしまうと全く違う曲の姿が見えてくる。特に本日演奏される終楽章の旋律の何と平明で美しいことか。この楽章は弦楽合奏を基本として構成されている。ごく短い序奏のあと、弦楽器にテーマが現われる。このテーマがホルンとの間を往復しながら曲は進行する。マーラーの特徴とされる突飛な転調や強弱の急激な変化はほとんどみられず、強奏はあっても終始穏やかによどみなく音楽は続く。全体を支配するのは高揚でも沈鬱でもない落ちついた気分で、他のマーラーの交響曲のように何らかの具体的なイメージを曲から聴き取るのは難しい。マーラーがその円熟期についに達成した「音楽の力」のみによる芸術という意味で、マーラーの最高の作品といえるのではないだろうか。



グスタフ・マーラー

新響がこの曲を演奏するのはこれが２度目である。１度目は1983年１月、今回と同じ山田一雄先生の指揮で、日本のアマチュアとして２回目の演奏だったと記憶している。団内のことで恐縮だが今年４月に世を去った団員の橋谷幸男氏がこよなく愛した曲でもあり、新響マーラーシリーズ完結の記念すべき演奏会に、この至高の作品をはからずも演奏することになった。これも故人の引き合わせだろうか。　　（新交響楽団オーボエ奏者）

編　成：ピッコロ１、フルート４、オーボエ４（コールアングレ１）、Esクラリネット１、クラリネット３、バスクラリネット１、ファゴット４（コントラファゴット１）、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、チューバ１、ハープ１、ティンパニ２人、大太鼓、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、小太鼓、弦５部

さすらう若人の歌

斎藤　めぐみ

親愛なるグスタフへ

あなたの『さすらう若人の歌』を聴きました。過去のこととは言え、あなたと結ばれ得なかった私の耳に、それは痛い歌でした。殊に３曲めの“O, Weh（オー ヴェー）！”（おお、くるしい！）の連呼など、あまりに率直な表現には、逃げだしたくなるほどでした。けれども、若い時代の失恋の嘆きにとどまってはいないことは私にもわかります。４曲め、菩提樹の木かげで安息を見出すくだりは、後年の『大地の歌』にも通じる、あなたの自然への想いがこめられていますね。『大地の歌』でも、人生に疲れた≪わたし≫は山をさすらい、安住の地を求める。実際あなたは、よく野山を散歩しては、作曲のための霊感を得ていましたから、自然がいかに愛と神秘に満ちているかを肌で感じていたのでしょう。それにしても、「なにもかもがもとどおり良くなった」と言いながら、救い難いほど陰鬱なその結びのフルートの和音はどうでしょう。ここで私はまた『大地の歌』の一節、「生は暗く、死もまた暗い」を思い出してしまうのです。失恋の悩みはまさに

生の暗さ。菩提樹の花びらを雪のごとく浴びながらの眠りは、かすかに死への憧れが匂いますが、それもまた暗いのです。

ウィーン郊外のあなたのお墓へ参りました。名まえだけを彫った白い四角い墓石に、小さな赤い花が映えていました。あの時の、陽に暖められた空気のむこうに小鳥のさえずりがきこえるようなそんな穏やかさの中に、あなたの魂も憩っていてほしいと願ってやみません。

かつてのあなたの歌手より
（新交響楽団ヴァイオリン奏者）



ウィーン郊外にあるマーラーの墓

訳詩

Ⅰ．愛する人がお嫁に行くよ

愛する人がお嫁に行くよ
喜ばしいその婚礼の日は
ぼくにとっては悲しみの日よ！
自分の小部屋に入って行って
ほの暗い小部屋にとじこもって
泣くんだ、愛する人を想って泣くんだ
いとしいぼくのあの人を想って！

青い花よ、青い花よ！
しおれるな！　しおれるな！
かわいい小鳥、かわいい小鳥よ
緑の野原でおまえは歌う
ああ、この世はなんて美しいんだ！
ピィチク、ピィチク！

鳥よ歌うな！　花よ咲くな！
春はもう過ぎ去ってしまった！
歌という歌も今はやんでしまった
夜、眠りにつくときに
ぼくが思うのは傷ついたこの心
傷ついたこの心よ！

Ⅱ．けさ野原を歩いて行ったら

けさ野原を歩いて行ったら
草の葉にはまだ露がおりていて
愉快なウソ鳥がぼくにこう言うのさ
“ちょっと、君！　ねえ、おはよう！
いい日になりそうじゃありませんか？
チュン、チュン！　美しくてキラキラしてる！
この世はなんて素敵なんだ！”

野に咲くつりがね草も
陽気に、ごきげんうるわしく
小さな鈴をチリリン、チリリンと
振りながら朝の挨拶をする
“いい日になりそうじゃありませんか？
チリリン、チリリン！　いい気分！
この世はなんて素敵なんだ！
ヤッホー！”

そしてそのとき陽の光を浴びて
地上がいっせいにきらめき始めた
全てが響きをたて色あざやかになった
陽の光の中で！
花も鳥も、大きいのも小さいのも！
“こんにちは、いい日和じゃありませんか？
ねえ君、そうでしょう、すばらしい世界だ！”
今ならぼくの幸運も開き始めるだろうか？
いや、いや、ぼくは思う
ぼくの人生に花咲くことは決してない、と

Ⅲ．ぼくは真赤に焼けたナイフを持っている

ぼくは真赤に焼けたナイフを持っている
一本のナイフを、胸の中に――
おお、くるしい！　そいつは深く突き刺さっている
どんな喜びにもどんな楽しみにも
ああ、なんという凶悪な客だろう！
決して静まらず
決して休まない
昼も、夜も
ぼくが寝ている時でも――
おお、くるしい！
空を見上げるといつも
そこに二つの青い瞳がある
おお、くるしい…　こがね色の草原を行けば
かなたからたなびくブロンドの髪が
風にそよいで見える
おお、くるしい！
はっと夢から醒めたとき
きこえるのは彼女の銀色の笑い声――
おお、くるしい！
願わくば、黒い棺台に横たわり

決して目を開かずにいられたら！

Ⅳ．愛する人の青い二つの瞳が

愛する人の青い二つの瞳が
ぼくを広い世の中へと追いやった
だからぼくは最愛の地に
別れを告げねばならなかった
青い瞳よ、なぜぼくを見つめたのだ？
ぼくの心に永遠に消えぬ傷を残して――！

夜のしじまの中ぼくは家を出て
暗い野を越えて行った
誰ひとりさようならを言ってくれる人もない
さようなら！　旅の道連れは愛と悩みよ！
道の辺に菩提樹が一本立っていた
そこでぼくは初めてぐっすりと眠った――

花びらを雪のようにぼくにふりかける
その菩提樹の下で
ぼくは人の世の仕打ちを忘れた
なにもかもがもとどおりに良くなった！
なにもかも！　愛も悩みも
世界も、みんなみんな！

（訳：斎藤めぐみ）



マーラーのシルエット。ハンス・シュリースマン画。Edward Seckerson; Mahler, Omnibus Press, 1984 より。

編　成：フルート３（ピッコロ１）、オーボエ２（コールアングレ１）、クラリネット３（バスクラリネット１）、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ハープ１、ティンパニ、トライアングル、グロッケンシュピール、シンバル、大太鼓、タムタム、弦５部

交響曲第１番

桑形　和宏



初版本の表紙

今日サントリーホールに新響の演奏を聴きに来て下さった方々は、どういったきっかけでマーラーの音楽に興味を持つようになったのでありましょうか？　第６番の圧倒的な第一印象がきっかけとなった方もいらっしゃるでしょうし、また第８番の異常なまでの盛り上がりに感銘を受けた方もいらっしゃることでしょう。

しかしなんといっても今日演奏する第１番からマーラーの音楽に親しみ始めた方が多いのではないでしょうか。かく言う私もそのひとりですが、まずこの曲は長さも約55分と短い（？）ですし、親しみやすくわかりやすい旋律や和声、若さ故による爆発するような情熱と色彩感あふれるオーケストレーション等が大きな魅力となり、聴き手を飽きさせることのない素晴しい作品となっています。また作曲に足かけ５年という長い年月をかけ細部にまで入念な努力を払ったことが、この作品の完成度をより高いものにしています。私とほとんど同い年の28歳の青年の手になるものとは到底思えません。

第１番は青春の情熱と哀愁を類稀（たぐいまれ）な天分と霊感の閃きによって交響曲の中に結実させたというのが今日では定説となっています。しかしマーラーの忠実な弟子であったブルーノ・ワルターが、「この曲はすべてに圧迫

されたユダヤ人が未来の平和を夢見る姿をあらわしている」という主旨のことをウィーン・フィルの楽員に語ったという話が伝わっている等、どうもこの曲には、単に青春の結晶という一面的な内容だけでは片付けることのできない何かがあるようです。でもこの際そんなことはどうでも良いではありませんか。聴き手がその曲から何を感じとるのかは全くその人の自由でありますし、現実に第1番が多くの人々の心に何かを訴えかけることは事実なのですから。

何やら私見と解説がごっちゃになってしまいましたので、ここらで真面目に曲の概要に触れてみたいと思います。

初演は1889年11月20日、マーラーがその当時王立歌劇場指揮者の地位にあったブダペストで、作曲者自身の指揮によって行なわれました。当時は「花の章」付きの全5楽章からなり、「2部からなる交響詩」と題されていました。初演時はオーケストラの音響のみが注目されただけでしたが、5年後の1894年6月、バイマールで行なわれた全ドイツ音楽協会主催の音楽祭で同じくマーラーの指揮で演奏された時には、良い意味でも悪い意味でも大きな反響があったのです。有名な「巨人」というタイトルが付けられたのもこの時ですが、後にこの曲が標題音楽的に捉えられることを恐れたマーラーは、「巨人」という副題を含む各楽章に付された標題をカットしました。そして「花の章」もカットされ、現在の形での第1交響曲が出来上がったのです。

第1楽章 ゆるやかに、重々しく

大体ソナタ形式によっている。ゆるやかな序奏部ではこの曲を支配するマーラー独特の完全4度の郭公が聞かれる。主部の第1主題は今日の中プロである「さすらう若人の歌」の第2曲「朝の野辺を歩けば」からとられているが、テンポは幾分速めである。

第2楽章 力強く、しかし速すぎず

力強い主部と牧歌的な感じのするトリオを持つ複合3部形式。やはり完全4度で曲が始まる。

第3楽章 儀式的荘重と威厳をもって。ただし緩慢でなく

初演の時最も不評を買った楽章。ティンパニとコントラバスの2名の寿命を縮ませるこの楽章は、前述「若人の歌」の第4曲「彼女の青い目が」からとられている。

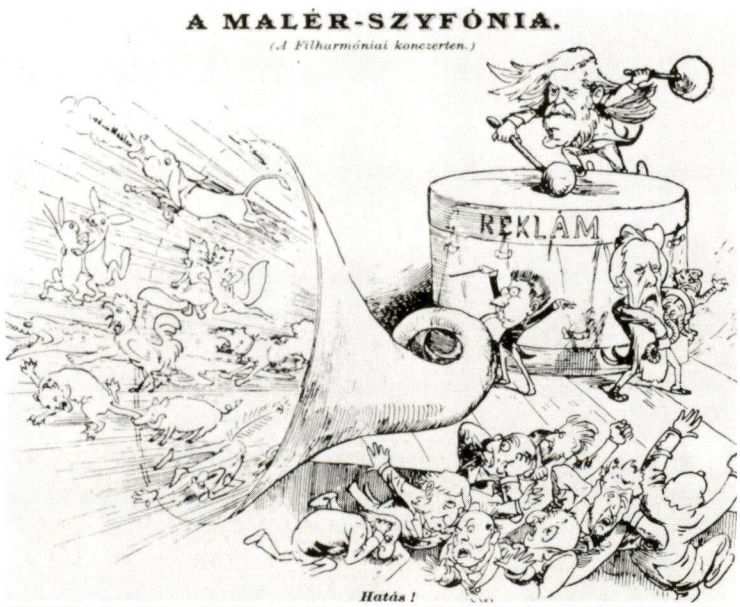
第4楽章 疾風怒濤のように

不安と熱情の渦の中に聴き手を巻き込んでいく激しい楽章。第1楽章の素材も各所に顔を出す。ワルターは冒頭のシンバルの強打について、「あらゆる圧迫から立ち上がり、ユダヤ人の国をつくるための戦いの始まり」と語っていたらしい。

マーラーサイクルの最終回にあたる今回の演奏会に向けて、新響は全員一丸となって取り組んでいます。団員の様子にも鬼気迫るものが感じられ、山田先生の音楽に精一杯答えようということで意見の一致を見ています。

実はこの原稿を書いている現在、山田先生による合奏はまだ行なわれていません。いよいよ次回が山田先生の初練習で、嬉しさと不安でワクワクしながらティンパニの上に原稿用紙を並べてこの解説を書いているのですが、急に練習しなくては大変だという気分になったので、このあたりで失礼します。（新交響楽団ティンパニ奏者）

編　成：フルート4（ピッコロ2）、オーボエ4（イングリッシュホルン1）、クラリネット4（バスクラリネット、Esクラリネット各1）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ1、ハープ1、ティンパニ2人、大太鼓・シンバル・シンバル付き大太鼓・トライアングル・タムタム各1、弦5部



交響曲第1番の初演の時に描かれた戯画。まさに「疾風怒濤の如」き4楽章が当時どのように受け止められていたかがうかがえる。Kurt Blaukopf; MAHLER, a Documentary Study, Thames & Hudson･London, 1976より転載（P.3～5も同じ）。


音楽、すくすく。
著作権が育てる、
かけがえのない音楽
植物がすこやかに育つには、水や光が必要なように、音楽がすこやかに育つには、著作権がしっかりと守られることが大切です。
JASRACはやがて創立50年——ひたすら著作権を守り、音楽を育てていきます。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　芥川 也寸志
〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551

マーラーシリーズの記録

'79.12.1	第86回演奏会 マーラーのタベ	マーラー＝「花の章」／交響曲第5番	指揮：山田一雄　東京文化会館
'80.11.20	第90回演奏会 マーラーシリーズ2	モーツァルト＝コンチェルト・ロンド ニ長調／マーラー＝交響曲第6番	指揮：山田一雄　日比谷公会堂 ピアノ：渡辺達
'81.9.19	第93回演奏会 マーラーシリーズ3	マーラー＝交響曲第7番	指揮：山田一雄　新宿文化センター
'83.1.23	第98回演奏会 マーラーシリーズ4	モーツァルト＝交響曲第35番「ハフナー」／マーラー＝交響曲第9番	指揮：山田一雄　簡易保険ホール
'83.11.1	第101回演奏会 マーラーシリーズ5	柴田南雄＝北園克衛の「三つの詩」／マーラー＝交響曲第2番「復活」	指揮：山田一雄　東京文化会館 独唱：S大島洋子　A木村宏子 合唱：新星日響合唱団
'84.9.26	第105回演奏会 マーラーシリーズ6	マーラー＝交響曲第3番	指揮：山田一雄　昭和女子大学人見記念講堂 独唱：A伊原直子 合唱：晋友会、藤沢ジュニアコーラス
'85.7.20	第108回演奏会 マーラーシリーズ7	シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／マーラー＝交響曲「大地の歌」	指揮：山田一雄　新宿文化センター 独唱：A辻宥子　T伊達英二
'86.4.6	第110回演奏会 マーラーシリーズ8	マーラー＝交響曲第8番「一千人の交響曲」	指揮：山田一雄　東京文化会館 独唱：S豊田喜代美・大倉由紀枝・岩崎由紀子　A辻宥子・春日成子　T林誠 Bar勝部太　Bas岡村喬生 合唱：新響30周年祝祭合唱団(武蔵野合唱団、荒川少年少女合唱隊、台東区立金竜小学校音楽部、藤沢ジュニアコーラス、多摩ファミリーシンガース)
'87.6.21	第116回演奏会 マーラーシリーズ9	ムソルグスキー/ラヴェル編＝組曲「展覧会の絵」／マーラー＝交響曲第10番・アダージョ／ラヴェル＝「ダフニスとクロエ第2組曲」	指揮：山田一雄　サントリーホール
'88.1.17	第118回演奏会 マーラーシリーズ10	ムソルグスキー＝「禿山の一夜」／ラヴェル＝「スペイン狂詩曲」／マーラー＝交響曲第4番	指揮：山田一雄　新宿文化センター 独唱：S大沼美恵子
'88.7.31	第120回演奏会 マーラーシリーズ11	マーラー＝交響曲第9番第4楽章アダージョ／さすらう若人の歌／交響曲第1番	指揮：山田一雄　サントリーホール 独唱：A伊原直子



「一千人の交響曲」の練習風景。全体練習の会場には苦労した。1986年4月、立教小学校体育館にて。

演奏会評より

《聴く歓び》

新響による マーラー「第六」を聴く

柴田南雄

アマチュア・オーケストラの「新響」（音楽監督・芥川也寸志）が、山田一雄の指揮でマーラーの「第六交響曲」を上演するというので、何はともあれ、きき に行った（十一月二十日、日比谷公会堂）。

じつは、わたくしはこの同じ曲を、旧制高校一年生の時、同じ日比谷公会堂できいている。記録を繙くとそれは昭和九年二月十七日のことで、以来、半世紀に近い時が流れた訳だ。「何はともあれ」、といったのはそうした個人的な、多分に感傷的な事情によるのである。この「悲劇的」というより、むしろ当時のわたくしには絶望的な音楽と思えたマーラーをきいたことが、一生を音楽で過す一つのキッカケになった、という意味で今もってそれは忘れられぬ一夜なのだ。その時の指揮者はマーラーの弟子でミュンヘンの名家の出の故クラウス・プリングスハイム・トーマス・マン夫人とは双生児の弟妹で、氏の急逝のハンス・プリングスハイムさんは今も東京でジャーナリストとして活躍している。当時、プリングスハイムが外人傭教師をつとめていた東京音楽学校（今の芸大音楽学部）のオーケストラを振っての大曲調の上演だった。以来、この一時間二十分を要する長大な難曲は、日本では絶えて演奏されることなく四十年あまりが過ぎ、ようやく昭和五十年にN響定期に初めて以来、急速に近年のマーラー・ブームに乗って各オケに何回かとり上げられ、先年は東大オケ（故山川正昭指揮）でも演奏している。

先夜の指揮者、山田一雄氏はプリングスハイムの上演時には東京音楽学校ピアノ科在学中、「その時たしかチェレスタかハープかどっちか弾いていたよ」ということだった。当時のプリングスハイムの一連のマーラー上演は、明らかに孤立した駈的な仕事だった。そうした曲目が大学オケ、アマ・オケにまで下りて来た時の流れ、日本人が洋学を吸い尽すエネルギー、を思わずにはいられない。

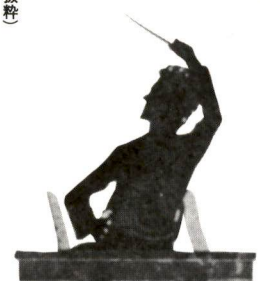
さて、その夜の山田一雄の指揮は、往年の「第八」初演をほうふつとさせる熱気あふれるもので、いわば決定的瞬間の連発によって聴者の音楽的感興を絶え間なく誘発し、自他ともに音楽的興奮の坩堝と化す、といった趣の演奏であった。すでに実況盤のうんぬんされる時代に、この演奏がそのまま録音されていたとしたら、それは一つの歴史的記録として、後世に残るものとなったであろう。

十二月は〈第九の月〉でもあり、今年（一九七九年）も各オーケストラによって有日のように第九演奏会が開かれていた。それに、アマチュアのオーケストラや合唱団のコンサートが数多く催されていたこと、それから第二十四回海外派遣コンクールが開かれたこと、などもこの十二月の特徴的な出来事としてあげられる。

アマチュア・オーケストラでは新交響楽団第八十六回演奏会が、とくに印象に残る（12月1日　東京文化会館）。この夜はハーフナーの交響曲第五番」が山田一雄の指揮により演奏された。一口でいえば、作品と指揮者に対する高い共感が、オーケストラのメンバー一人一人に宿っていたのが強く感じられた演奏であった。つまり、雑念のない集中が見られたのであり、しかものびやかであり、感動しつつ奏しており、結局その、メンバー達の感動が、聴き手の胸を打っていったのである。とくに感銘深かったのは〈交響曲第五番〉。呼吸深い歩みの中に細やかな陰いを建め、悲哀の滾も覚えるのびやかせた第一楽章、作者の心の揺れを存分の忌憚なさで描き出していった第二楽章、旺盛な生命感で彩りつつぎすぎず、結局熱い喜びを表出したスケルツオの主部、対照的に温和なロマンが薫ったスケルツオの二つ目のトリオ部、しなやかな歌がファンタジックに浮遊し平和な夢を大きく漂わせた第四楽章、新鮮な空気を噴出させつつ力強いクライマックスを築いていった終楽章と、各々実のある表現で演奏され、聴き終えたとき欲求不満の ない強い納得が得られたのである。第四楽章において、より一層山田の指揮に全員が密着していってほしかったこと、終楽章においては 躊躇たる歩みが望まれたこと、総じてさらに洗練された響きが欲しかったこと、など惜しまれる点も散見されたが、よりよい演奏を生み出していこうという結びのある気力、それに全員の協力心には、清々しいものを憶えたのだった。今後もまた、理想をのびのび追っていってほしい、音楽に対する情熱を含まず表出していってほしい。

◉長谷川武久

▲音楽の友80年2月号
◀「海」81年11月号（抜粋）



《聴く歓び》

マーラーの交響曲 三曲を聴く

柴田南雄

七月の、朝比奈隆／大阪フィルの東京公演での第七が、この指揮者一流の線の太い交社な音楽で、これも忘れ難い。とにかく、この〈夜の歌〉（声は入らない）は五楽章の長尺物、恰好をつけるだけでも大へんだ。その同じ第七を、マーラーには昔から縁の深い山田一雄が、アマチュアの新響を振って燃焼度の高い激演（?!）を見せた。これは出来としては前回の同じコンビの第六のほうが上。アマは意欲の程はじゅうぶんでも、楽器による不揃いがどうしても目立つ。とは言え、一般前のプロの水準より、今やはるかに上だが。

第五は秋山和慶／東響と、六月末の定期のワグネルをきいたが、前者は秋山の手慣れた棒であっさり仕上がり、第二楽章のコーダなど美しい瞬間もあったが何となく印象が薄く終った。後者は、明らかに手に余るパートがあちこちにあるのに、全員の熱っぽい取り組みがき手を引っぱって飽きさせなかった。大学オケのマーラーでは数年前の東大の第六が上出来だったが、ただ、野球でも何でも、学生団体はどうしても波があるのが泣き所。今の東大オケにあの再現は無理だろうともあれ、上記の「千人」のコーラスも半分以上はアマチュア、今や音楽を実践するアマチュアの存在が直接、間接に日本人の音楽生活に大きな意味を持って来ているのに、ジャーナリズムや批評が依然、外来のスターばかり追っているのは、じつに遅れているとしか思えない。筆者も日頃その片棒を担いではいるのだが。

日本のマーラー・ブームはバーンスタインの全集盤など、明らかにレコードが先行し、渡辺暁雄の都響の続演の頃から盛り上がって来た。ただ、昨今のレコードにきくレヴァイン／フィラデルフィア、テンシュテット／ロンドンにいるメンバー諸氏も、この音楽のずっしりした手ごたえを、その手どおりとともに十二分に味わい尽した、といった趣の演奏だった。ステージにわりと近い所できいたお陰で、メンバーの人たちのアマチュアらしい体あたりの的な打ち込み方が、その弾きぶりや表情からよく判った。

そう言えば、三年ほど前に東大オケが同じマーラーの「第六」をやった時にも、わたくしはこの欄に何か書いたのを思い出した。彼らの演奏は、技術的には今回の新響よりも洗練された、破綻のない、あえて言うならプロもはだしの上手なものだった。だがそれはいかにも、エリート集団がある管理機構の下で能率的にソツなく、一糸乱れず行動している、といった趣の音楽で、一体何のために仲間と一緒に音楽しているのか、それを問いたい思いがした。当時、その旨を書いたところ、彼らにはそれが通じなくて、ただ単純に褒められたと受けとられたフシがあり、こちらは二度びっくりした。新響の人たちに、何のために仲間と音楽をやるのかを問う必要はないだろう。おそらくプロ以上に、音楽と生活が密着している人たちの集団といえるかも知れない。音楽に多少の雑音が混っているとは、おそらくはそうためであろう。

▲中央公論社刊文芸雑誌「海」1981年新年号

▶音楽舞踊新聞86年4月21日付

新交響楽団創立30周年記念
高い水準の「一千人の交響曲」

日本のトップ・クラスのアマチュア・オーケストラで、十年前にはサントリー音楽賞も受賞した新交響楽団が創立三十周年を迎えた。その記念公演の一つ、マーラーの「一千人の交響曲」を聴いた。

指揮は山田一雄。独唱は豊田喜代美、岩崎由紀子、大倉由紀枝、辻宥子、春日成子、林誠、勝部太、岡村喬生。合唱が武蔵野合唱団と今回の公演のために公募して組織した新響三十周年祝祭合唱団、それに慶応少年少女合唱隊、金竜小学校音楽部、藤沢ジュニアコーラス、多摩ファミリーシンガーズで、約七百名の合唱と百五十名近いオーケストラでの演奏であった。

まずオーケストラ、合唱ともに、とつによく練り上げられているのに驚かされた。アマチュアの団体というと、音楽に対する情熱や表現意欲は旺盛だが、技術がそれに追いつかず熱気だけが空回りすることも多いのだが、ここではまったくそれが感じられず、むしろ非常に知的で洗練された表現がその根底を支えていたように思う。だから一見複雑にみえるこの壮大なマーラーの音楽の構成がじつに明確に浮出して、見事なまでによく整理されていた。これは山田一雄のすぐれた解釈にもよるが、それを完全に表現し得た演奏者たちの力倆は高く評価されてよい。

ことに第一部はまさに圧巻で、聴く人に強い感動を与えた。第二部の中間では表現にやや凝集力を欠いた部分もあったが、それでも各所に聴かせ所があり、終末合唱でふたたび第一部と同様の感銘を蘇えらせてくれた。ただ合唱部はラテン語の音色感はよかったが、ドイツ語の音色感と子音の発音をもっと大切にして欲しかった。独唱陣ではとくにテノールの林誠の好演が光っていた。

いずれにせよ、プロのオーケストラもうかうかしてはいられないほどの立派な演奏で、心から拍手を送りたいと思う。

四月六日東京文化会館。

渡邊學而

▼マーラー、そしてその演奏について

「ところで、このようなマーラーの音楽を伝えている演奏家がいったい何人いるだろう。マーラーを演奏していて、マーラーが鳴っていない演奏が少なくない。たとえば「復活」の最後など「グージー！」の類稀な美しい、まるでお祭り騒ぎなのである。

最近人気のあるアバドやテンシュテットもそれなりの良さもあって悪くはない。しかしもしバーンスタインやバルビローリ、あるいはクーベリックのマーラーをまだ聴いたことがなかったら、ぜひ聴いてほしい。そこには「マーラー」が鳴っているだろう。

日本でマーラーが聴けるのは多少個人的な好みも入るかもしれないが、おそらく山田一雄と新響のコンビだろう。新響はアマチュアオケだが、信じられない程すごい実力だ。第一マーラーへのただならぬ共感が溢れていて、それが山田氏のマーラーへの深い理解と結びついて最高の演奏を聴かせる。

つい先頃（9月26日）も第三番を聴いた。小さな技術的ミスを除けば、完璧とも言える名演であった。弦は美しく、打楽器は理想的に鳴り、金管は抜群によく通る。響きの充実もさることながら、音楽は大きく息づき、大胆に、また繊細に、これほどの音楽を伝えている演奏家が一大体となって情熱をかたむけ、聴く人がいるか、マーラーの魂に訴えかけ、感動に胸打ちふるえた演奏に接した事はない。特に終楽章の深い感動を呼びおこす「ラージー！」この類稀な美しい旋律に、私は感動を越えてエクスタシーさえ感じた程だ。一回きりでは味わい尽くせない見事な演奏だった。

マーラーを演奏することに対する特別の情熱や使命感を持ったこのような名演に出会うことは、まれである。マーラー・ファンにとっては無上の喜びである。たとえ演奏は上手でも、単に人気が出てきたからやるとか、仕事だからやるというのでは、どこか空虚さを残してしまう。マーラーという高度の集中力を要する音楽に接する聴衆にとっては、演奏家のそういう心理などは容易に感じとってしまうのだ。

他にも若杉氏や小林研一郎氏など、すぐれたマーラー演奏をするといえる人がいるが、毎年マーラーに挑戦し、しかも指揮者とオケが一体となって情熱をかたむけ、現在最高のマーラーが聴けるという点で大きな拍手と期待を寄せたい。〒351朝霞市膝折町1-14-41　斉藤啓一　二十四歳・自営業

▲音楽現代1984年12月号読者投稿欄「はだかの広場」より抜粋。

東京の演奏会から

'79 12月

マーラー、山田一雄、そして新響
——マーラーシリーズを終わるにあたって

マーラーに魅せられた人達

第２番『復活』を練習していた時、運営委員会では米国のG.キャプラン氏に演奏会の招待状を送った。氏は金融専門雑誌社の社長だが、マーラーファンの間では『復活』を自ら指揮する人物としてつとに有名である。本業で多忙を極めながらも、『復活』の演奏会とあらば世界中どこへでも足を運ぶ。そして彼のカーネギーホールでのデビューコンサートは大成功を収め、先年は東京で新日フィルを指揮して話題を呼んだ。

その演奏会は私も聞きに行き、彼のマーラーに対する情熱の深さに圧倒されたものである。同時代に生きる人間として、そして同じくマーラーを「演奏する」側の人間として、キャプラン氏の存在は大きな勇気を与えてくれる。リスクを恐れず、「リスクこそ人生」と言いきる彼の生き方は、先行き不透明な現代においてひときわ輝いてみえる。

思えば初めて第５交響曲を演奏してからもう10年たつが、その間にはキャプラン氏のみならずマーラーに魅せられた様々な人達との出会いがあった。桜井事務局長を初めとする日本マーラー協会の沢山のメンバー達。また新響の中にも色々な角度からマーラーに接近している仲間がいることがわかった。その中の何人かとツアーを組んで、京都まで山田一雄先生の『復活』を聞きに行ったのも楽しい思い出の一つ。そして今は亡きCbの橋谷さんからは、新しい曲を始めるたびに色々な人の演奏録音を聞かせてもらった。

最近では新響のシリーズだけでなく、自分達で仲間を募り山田先生の指揮で第９番を演奏してしまったメンバーもいる。全くマーラーに魅せられた人達のエネルギーは計り知れない。そして何よりも、10年という歳月に育くまれた１人の作曲家と１人の指揮者と１つのオケとの演奏体験は、私の中に大きな宝となって輝いている。

（Vla.門倉　百合子）

指揮と演出

私は日本に来て今年で10年、大学で英語を教えながら劇の演出を手がけてきました。

新響には８年前から加わり、チェロを弾きながらたくさんのことを経験してきました。特に真近に山田先生の指揮をみることは私の劇の演出にとてもいい刺激になっています。先生の指揮にはメンバーの自分自身でさえ予想もしない可能性をひきだす力があります。例えば、マーラーの第４番第２楽章の終わりの弦楽器のユニゾンで、*rit* のPizzicatoが２回ありますが、そこでは先生の指揮はただ単に鋭角にふられず、こきざみにふるえ、そのふるえはまるですべての可能性の糸をたぐりよせるようにもみえます。誰もが息をとめ、いすに浅くすわりその棒先を必死にみつめます。誰も次の音の合図がいつくるのかわからないのです。そして、ついに誰かが「タン」とはじめをひくやいなや、それにつづいてみんながいっせいにひくのです。私はそこで緊張が解かれるのを感じ、同時にこの緊張のかげで音楽が生まれるのを感じます。不確実性の一瞬にかけた音楽を私はとても美しいと思い、その場でその音楽に貢献できたことによろこびを感じます。同じことが劇についてもいえます。私は、自分のイメージを実現するためにキャストを機械的に操るのではなく、彼らの自分でさえ信じられないような可能性をめいっぱいひきだすことが大切だと信じています。そんなところが私の目指していることであり、山田先生の指揮によって絶えずかきたてられることなのです。もっと芸術的な芝居をつくるためにこれからも山田先生をお手本に頑張っていきたいと思います。

（Vc.ジョン・ブロウカリング）

山田一雄先生、そしてマーラーとの出会い

マーラーシリーズもまだ初期の頃である。ある練習の時、山田先生が急に棒を止めて言われた。「昨日の練習でここのシンバルたたいたの誰！」。かなり強い口調だったので僕は、シマッタ本番では僕のたたかない所なので少しいいかげんだったのかなと、恐る恐る手を挙げて「ハイ、僕です。」と答えた。「そう、君か、良かったよ。ハートがあった。」それが山田先生との出会いであった。

新響のすみっこで長年雑音を担当していた僕は、マーラーシリーズでも雑音を出し続けた。鐘、カウベル、ムチ、ドラ、そしてそのクライマックスは、あの６番の「ハンマー」。打楽器と言うものは、打点が目の高さに近い方が指揮に合わせ易い。我々の後でやった新日フィルでも、ハンマーは立て膝でたたいていた。それが、山田先生は、「君はヒゲもはやしていてカッコイイから、こうして真上から打ち下ろしなさいよ。」と身振り入りで指示して下さった。そうすると、打ち下ろす距離が長くなり、タイミングは取り難くなる。しかし、その分緊張感は増す仕掛になっている。

山田先生がマーラーのドラの使い方の奥深いことを示唆されたのは、最初の５番の時である。僕は、以来ほとんどのドラをたたく好運に恵まれた。それは、正にオーケストラにおける打楽器の醍醐味である。そして、その極みは「大地の歌」であった。「大地の歌」の空間を満

たしているあのドラの響きは、あたかも宇宙空間に充満している３Ｋ輻射にも匹敵するような気がする。心の深い所でマーラーと出会えた様な体験であった。

山田先生の指揮は、解放である。その棒の魔力で我々は解放され自由になる。我々は、山田先生のおかげで、マーラーの全交響曲を通し、自由の空気というものを思う存分吸い、格調高い音楽空間に心ゆくまで遊ぶことが出来た様な気がする。　　（Perc. 田中　司）

この曲をやるには若すぎる

「この曲をやるには若すぎる」と思ったのは大地の歌のとき。本番の緊張感と興奮の中、こんなことを感じたのがどんな状況か思い出すことは出来ませんが、この感覚だけは深く心に残っています。メロディーのもつ雰囲気で曲を奏で、作曲家が一生をかけた思想や思いの丈にまで深く入り込むことの出来ない私にとって、このような感覚がもてたのは一つの進歩。これもひとえにこのシリーズのおかげ、山田先生のおかげです。

一人の作曲家をシリーズでとりあげる。こんなすばらしいことがあるでしょうか。マーラーが好きではなかった私は、学生時代にやった１曲でマーラーの響きはわかったつもりでいました。それが数を重ね、新響の仲間たちで奏でた音の洪水／山田先生の表情や指揮棒の動き、指揮台からの飛び上がり方などが頭にこびりつくにつれ、マーラーの曲のすばらしさを感じるようになったのです。振り返って一生に二度とできそうもない大曲もあります。音がなくなりかけて、誰かでてーと叫んだ曲もあります。もっと練習をしておけばよかったと後悔した曲もあります。でもみんな良き想い出。シリーズの完結は嬉しくもあり悲しくもありという感じです。

（Vn. 志村　美佳）

床を見てごらんなさい

先生の棒に初めて触れたのは、マーラーシリーズ第１回の第５番初練習の時（1979）。

フルトメンクラウといわれたフルベンもかくやと思われる程に戸惑い、オケは乱れっ放しでした。１回さっと通された後のコメント「床を見てごらんなさい。一杯落ちているでしょう。*pp* とか*cresc.* とか *rit.* とか……」は一生忘れられません。〝音楽表現には無限の可能性がある〟〝指揮者の棒には即座に反応すべし〟〝譜面のすべての記号には常に忠実に〟といったオーケストラのイロハをこの時の練習で再認識したものです。

先生の身振りの激しさは余りにも有名。第８番「千人の交響曲」（1986）の本番では、直前に体調を崩されたにも拘らず、熱演で曇ってしまったメガネを指揮台の隅に放り投げ、舞台狭しと跳び回られるので〝メガネを踏みつけるのでは〟〝台からころげ落ちるのでは〟と気が気ではありませんでした（先生の指揮法の本には「指揮者たる者、聴衆にクツの底を見せる様な激しい動きをしてはならない」と書いてあるそうですが……）。

pp が又すごい。先生の音楽は即興性に富み、毎回の練習や本番でテンポや表情が異なるので、指揮棒の先から一瞬たりとも目が離せないのですが、*p* になるに従って音楽の発生源が、棒から腕、手そして指先へと移ってゆきます（顔の表情、目つきの変化にも要注意）。頼りの右手小指の先がついにヴァイオリン側の視界から消え去る時の緊張感、いや恐怖感は筆舌に尽し難いものがあります。

マーラーの音楽について先生は「カオスが爆発する瞬間と一本の絹糸が極限まで引きのばされる瞬間」と表現されています。先生のマーラーに 100 % 共感し、エネルギッシュな新響にとって、少々汚い音ながらも「爆発」は得意とするところ。問題は「絹糸」です。この10年間タコ糸から細目の木綿糸くらいの進歩はあったかもしれませんが、「極限まで細い絹糸」の音色はまだまだ。先生にマーラーシリーズを今一度お願いし、この境地を味わってみたい気持で一杯です。　　（Vn. 都河（つがわ）　和彦）

勇気づけられた言葉

ある練習の時、とても嬉しいお話をしてくださったことがあります。ある目的のためにこれだけの人がそれぞれ時間を割いて集まり、しかも無償で頑張ってやっている。こんな純粋なことはない。ここに集まっている人は、皆さん素晴らしい。その一言一言にどんなに勇気づけられたことでしょうか。辛い時、苦しい時、あの場のことを思い出すと、不思議と力が湧いてくるのです。

私はそんなヤマカズさんの大ファンの一人です。言うまでもなく、ヤマカズさんのマーラーは、様々な情感に溢れ、深みがあり、やっていて満たされて行くのです。恐かった10番の出だし、楽しかった４番、想い出深い９番…どれも私の大切な宝物です。

ヤマカズさん、いつまでも若々しく活躍してください。また、どうか新響のこともずっと愛していただければと思います。マーラーシリーズも最終回、いろいろな想いをこめて、精一杯弾きたいと思います。（Vla. 直川（ただがわ）　万里）

イスラエルフィルの「９番」と新響

オーケストラでチェロの椅子をひとつ暖めることを始めたのは高校のとき。それ以来費やした時間が確かに意味のあるものだったと思えたのは、３年前の９月、新響にはいったばかりの頃のことだ。

それはイスラエル・フィルをバーンスタインが指揮したマーラー９番の音楽会だった。

マーラーの９番を聴いたのはそれが初めてだった。正確にいえば、その日のプログラムがマーラーの交響曲で

あることしか知らなかった（そういうことをなかなか覚えられない性質なのだ）。私は、ふた月ほど前にはじめて出た新響の演奏会の、たいへん苦労した「大地の歌」の片鱗を感じながら聴いていた。

楽章がすすむにつれて、すばらしい演奏に特有の「これはこのままいったら物凄い演奏になるぞ」というはりつめた雰囲気が、オーケストラのメンバーと聴衆を支配した。終楽章が変ニ長調の息をひきとったとき、それは、音楽よりも音楽的な静寂だった。心を打たれた二千を超える人々の、マーラーの音楽によって呼びおこされた思いが、ひとつにまとまってゆっくりと昇ってゆくような、美しい瞬間だった。

初めて聴く音楽で、そんなにすばらしい演奏にめぐりあえたことを感謝するとともに、音楽的な感受性にとぼしい自分が、あの演奏の、時代を経てなおも美しい織物のような音のあやを見いだすことができたのは、オーケストラにいてこそだと、それまでの時間を心からいとおしく思った。そして今でも、マーラーといえばあの、音楽を超えて神聖なるものを垣間見た瞬間を思う。

あの演奏を生んだものは、マーラー、バーンスタイン、イスラエル・フィルに共通して流れるユダヤの血だろうか。百年前の音楽でありながらまぎれもなく同時代性を感じさせるマーラーの音楽は、捨ててきた数々のことどもの記憶を呼びさます。新響のマーラーは、団員ひとりひとりがマーラーの音楽によって呼びさまされたこうしたさまざまな思いを、山田先生にぶつけてつくりあげる演奏だと思っている。　（Vc. 吉川　具美）

これを吹かなきゃ死ねない！

オーケストラ奏者には、みなそれぞれに「これを吹かなきゃ（弾かなきゃ）死ねない」という曲が何曲かあるのだが、おそらくほとんどのトロンボーン吹きの場合、マーラーの交響曲のどれかをその一つにあげるだろう。私が新響に入りたいと思った理由のひとつも、マーラーをこんなにたくさんやる「非常識」な社会人オーケストラは他にないということだった。トロンボーン吹きにとってのマーラーのおもしろさは、曲の中でトロンボーンが実に効果的に使われているというところにある。ときによって、激しく、美しく、力強く、また静かに、非常に多様な性格の場面があらわれる。これは普通の楽器にとっては当り前のことなのだが、そもそもオーケストラ曲ではまず吹く箇所の少ないトロンボーンにとって、マーラーのような曲はめったにないのである。

新響に入ったことで、マーラーができるということの上に、山田先生の棒で、というすばらしい経験が付け加わった。これは、すばらしい、というありきたりの言葉では表現しつくせない経験である。ときに山田先生の指揮はわかりにくく、奏者泣かせだと言われることがある。ところが、出番の少ないトロンボーン吹きが楽器を置いて見ていると、これが全く違う。全身の動きをじっと見ていると、山田先生はどういうマーラーの音楽をやりたいか、ということが実によくわかるのである。これが、自分の出番になって、譜面半分指揮半分といった見方になってしまうとだめなのだ。いつもいつも、山田先生とマーラーというものの何分の一が表現出来ているのだろうか、と歯がゆい思いをするばかりである。それでも、これはなかなか、と思えるような演奏が何回かはあった。ただし、いつもそれが本番ではなく、練習のときであったのが、聴きに来ていただいたお客様にはたいへん申し訳ないことである。納得のいく演奏を今度こそ本番で、と思う。　（Trb. 志村　努）

8番の思い出

86年のマーラー第8番。僕は主に「祝祭合唱団」のマネジメントのお手伝いをした。本番一週間前の、最初で最後の（！）全体練習で、山田先生、「こんなんじゃ、どうしようもない！」と怒ってしまった。児童合唱が、全然棒についていけなかったのだ。先生は、とても思いつめられた御様子で、とてもこのままお帰りになれそうもなかったので、島田家と、今はシドニーにおられる長谷川さん（Fg）御一家で、先生を近くの喫茶店にお誘いした。長谷川さんが舞台の担当だったので、合唱や独唱の配置などについて、1時間程雑談まじりに話し合って、その日はお別れした。……本番での児童合唱は、その前日の特訓と、指揮者の正面に配置したことが奏効し、見事なできだった。打上げの後、山田先生が、プログラムの表紙に、「尊敬する島田清純先生、どうもありがとう」とサインしてくださった。これは、僕の大切な大切な宝物となっている。　（Vn. 島田　清純　元団員・在札幌）

ポスト・マーラーって誰!!

アマチュアオーケストラ新響がマーラーシリーズを開始したのが、1979年。企画、検討の時期を含めると、あれから10年以上の歳月が経った。当時、世の中では、マーラーの曲といえば、せいぜい1番か2番か4番のシンフォニーで、むしろブルックナーの曲の方が親しまれていた。新響は、アマチュアオーケストラの独自性を求めて、日本の交響作品展が軌道に乗った頃だったが、同時にさらなる柱を模索中だった。多く論議を重ねる中で、以前よりマーラーへの取組みを強く主張したのが、人生半ばにして去る4月に惜しくも他界した橋谷幸男君（コントラバス）だった。以来今日に至り、マーラーの曲は、全世界のプロのオーケストラの重要なレパートリーとなり、演奏回数、CDの売り上げ等、かつてのベートーヴェンを追い越すまでの状態になった。これを称して人は、マーラーブームという。一般的に、ブームとは一過性の人気の意味合いが強い。果たして、新響による本日のマー

ラーシリーズの完結をもってして、とは言わないまでも、そのマーラーブームは、まもなく終わりを迎えるのであろうか？　しかし、答はノーであるに違いない。なぜならば、一言で言えば、過去の歴史が証明していると考えられるからに他ならないからである。この10年間の世界的なマーラーへの注力は、この作曲家をバッハやモーツァルトやベートーヴェンと同様に位置付けたし、彼らを含め多くの作曲家たちが時間的な差はあっても、同様のプロセスを歩んで今日に至っていると思われるからである。その意味からすれば、ポスト・マーラーとしてショスタコービッチやリヒャルト・シュトラウスやシベリウスの名前が挙げられるのは至極当然のことであり、また時代の要求でもある。いわゆるクラシック音楽が他のジャンルの音楽と最も違うところは、それが国を越えて、なおかつ永久にといっていいほど何百年、何千年に渡って人々に愛され続けられる事だと私は思う。マーラーの曲は正に今、その評価を得たに違いない。

最近、出版された近藤滋郎著の「アマチュアオーケストラ入門」（音楽之友社）によれば、日本のオーケストラの第一歩は、明治14年、1881年だそうで、マーラーの第１交響曲は、その８年後の1889年にブダペストで初演されている。100年をやっと越した日本のオーケストラの歴史の中で、約半世紀に渡り指揮者として活躍されている山田先生と共に、今、マーラーの全交響曲を締めくくろうとしている新響は、単に一アマチュアオーケストラとしての枠を大きく越えて、一世紀の日本のオーケストラ界に、また一つ、大きな金字塔を打ち建てるに違いない。

網津有人（Cb. 中尾）

みんな欠食児童のように音楽を

７月９日（土）くもり時々晴れ、暑い。

きょうは、とても暑い一日だった。もうそろそろ梅雨が明けそうだ。

初めて山田先生の練習があった。きょうの練習は本当にすごかった。皆んなまるで欠食児童のように音楽をむさぼっていた。マーラーを山田先生に託する皆んなの気持ちは燃えている。思い余って棒より早く出てしまったり、棒より速く走ってしまったりという「勇み足」が続出してしまった。３楽章のところで、先生は「池袋のような」という表現を使われた。僕は、ネオンギラギラではなく、見たこともない20～30年前の、電柱にはまだ裸電球のある「池袋」を想像してみた。マーラーの曲の中には、そういう華やかなようで寂しい感じが漂っていると思う。

考えてみると山田先生に初めてお会いしたのはちょうど10年前だ。首や手首に時として貴金属を忍ばせる銀髪の紳士は、女性から「すてきなおじさま」と呼ばれたり、皆んなに愛されてきた。あれから10年、確かに僕は10歳年をとったと思うが、先生は全く変わらない。銀髪の数が少し減ったかな。いやいやそんなことはない。変らないものを見ると自分も変っていないような気がして10歳位若返ったような気もする。

練習を終えて混雑した電車に10分も乗っているときょうの感動も薄らぎはしたが、駅を出て家に向って歩いているともう一度湧き上ってきた。７月31日のお客さんにも、家にたどり着く頃にもう一度思い出してもらえるような演奏ができたらと思う。

きょうはとてもあつい一日だった。７月31日は、もっとあついかも知れない。

（Ob. 諏訪内　尚克）

うちの子は生まれる前からマーラーを…

Ｉ：二人で初めて新響を聞いたのは“大地の歌”だったね。

Ｍ：それから１カ月くらいして二人で一緒にオーディション受けたのよね。

Ｉ：そう、新響が“千人”をやるっていうんでどうしても……。

Ｍ：でも“千人”の時はもうお腹大きくて大変だったわ。

Ｉ：うちの子もお腹の中でマーラーやショスタコービッチやルトスワフスキーに親しんですごいもんだよ。

Ｍ：山田先生の棒だとふっと身が軽くなるの。先生と新響はうちの子の生まれる前の育ての親みたいなものね。

Ｉ：山田先生とマーラーやってると己れの未熟さを本当に感じるね。

Ｍ：年輪を重ねて今なお青々と葉を茂らせる大木って感じかしら？山田先生って。

Ｉ：僕たちは何かなあ？細々と伸びる万能ネギってところか。

Ｍ：万能……ねえ？

Ｉ：いろいろ大変なんだよ僕たちは！仕事したり、育児したり、酒飲んだり、新響したり……トンカツ食ったり。

Ｍ：でも今回は出産でついに休団！くやしいわ。

Ｉ：いいじゃないか、客席から新響を聞いてもう一度ファイトを燃し直すいいチャンスになると思うよ。

Ｍ：そうね、山田先生と新響とマーラーが一つになって醸し出す音楽を是非聞きたいわ。

Ｉ：先生の感性の一つでも多くを実現したいもんだね。やっぱりマーラーはのめりこまないとダメだよ。お高くとまってやる曲じゃない。いつもみんなやってる生活みたいな音楽なんだから、喜んだり、泣いたり、落ちこんだりね。その気になればきっとうまくやれるよ。だから面白いんだよ、マーラーは……。

Ｍ：エネルギッシュでバイタリティーあふれる演奏でないとね。特に“１番”は。

Ｉ：山田先生の若々しさには本当に頭が下がるよ。

Ｍ：そうね。うちの家族４人の年を全部足しても、先生には及ばない。

I：よし、それならアマチュアの心意気で勝負だ！
（I：Vn. 日高　容、M：Vc. 日高　美加）

恐い蟹・マーラー

想えば、新響とマーラーとの関わりも知らずに、オーディションを受けてしまった。当時の自分が莫迦（ばか）だったのだ。

『春の祭典』に明け暮れした学生オケ（敢えてその名は秘す）の時代を経て、丸２年余り、笛（フルート）１本サラシに巻いて、あれこれ遍歴していたのも、偏（ひと）えに、もっとフツーの音楽の出来るオケを求めての事だったのに、人伝てに、新響の笛のトップに空席が出来たと聞いて、ついムラムラと身体が動いてしまったのがいけなかった。

入ってみれば、恐い蟹。否、こは如何に!!マーラーを演（や）っているではないか。これには思わずうなってしまった。ウーム。

繚乱の花の樹の根元に屍体が埋まっていてそれ故、花もより美しく咲き続ける。と云った或る種異様な魅力が、彼の音楽にはあって、その病んだ美しさに、今は感銘を受けるが、当時の僕としては、散りゆく花をこそ、愛でたい気持ちが強かった。謂わば、「花の下にて春死なむ」とする心だが、それと屍体が埋まってるのとじゃ、全然意味が違うもんね。ずい分悩みましたよ、なじめなくて。オケにも、音楽にも――。（棒にも！？）

ところが、以来６年経ち、周りを見渡たせば状況がずい分変わってきたし（彼の音楽がこんなに「大衆化」するなど誰が考えたろう）、僕自身も、ともすれば「屍体」の存在を忘れ、「おっ、何だマーラーもフツーの音楽じゃねェか!!」などとほざいている。いけませんな。病める音楽が、健全に響く様になっちゃあ、人もオケも終わりというもの。冒頭の反省の因（もと）も、実にここにある次第で。

聖と俗。陽と陰。人間の本性を敢えて表出した、メリハリある演奏が必要な筈だが、何だか、皆物分かりが良くなっちまって、最近の新響の演奏（マーラー）は、１パック60円の豆腐といった処。マーラーに飼いならされたオケというのも珍しいが、これだけやれば無理もない。

しかし参ったな――。まったく。　（Fl. 松下　俊行）

水けむりのような音を！

２年ぐらい前に韓国の伝統的な竹の横笛・テーグムの演奏を聴いたことがある。私はこの小さな演奏会ほど大きな衝撃を受けたことはなかった。その素朴な竹笛がもつ表現力！　この奏者は座りながら１時間以上ぶっ通しで、弟子に額の汗を演奏中――休みなしだから、まさに吹いている最中に拭かせながら、連綿たる物語を笛一本で聴かせるのだ。ある時は泣き、笑い、跳びまわり、悲しく、激しく、また静かに独り言をつぶやく。この笛は、確かに何か「ことば」を話していた。

そこでふと私は山田一雄先生・ヤマカズさんの音楽に共通なものを感じたのを覚えている。練習の時からすでに全身―白髪の先から、ほとんど誰にも見えない地上数10センチから踊り上がる指揮棒までに漲っている「ことば」。オーケストラは、ひとつの音符にいかに表現の可能性があるかを思い知らされることになるのだ。

「楽譜には音楽のほんの何割しか表現されていない」とよく言われる。ただピアノとあっても、いろいろなピアノがある。いつだったか、ラヴェルの「スペイン狂詩曲」をやった時、ハバネラで弦楽器があのスペインの気だるいリズムを弾く部分でヤマカズさんは「水けむりみたいな音！」とおっしゃった。ただの p が２つ―文部省用語言うところの「とても弱く」―なんてものじゃない。

また、いつかのマーラーの時、チェロがピチカートで３拍子の頭をずっと弾き続けるところでヤマカズさん曰く「もっと自発的に弾いてよ！　神様が下さった雫なんだから」。

笛で泣き、笑い、囁（ささや）くことがあの竹の笛にできるのなら西洋楽器にはできないのだろうか？　ドイツからは五線譜と楽器だけを輸入したからできません、だろうか。

「ドイツ人に生まれなかったのが一生の不覚」という言葉がある。所栓あちらにはかなわない云々…。しかし、そんなことを言っているから「日本文化は日本人しか理解できない」なんて偏狭な発想が出てくるのだろう。ドイツだユダヤだ、狂気の音楽だと言って、自分とマーラーの間にわざわざお濠を掘ることもあるまい。ヤマカズさんの言う「水けむりのような音！」に共感することが、プロ、アマ、ドイツ、日本など関係なしの借り物でないマーラーを演奏することにつながるのではないだろうか。　（Perc. 今尾　恵介）

草野球に一流の監督が来た

我々アマオケは野球でいえば草野球だ。その草野球チームに一流のプロの監督が来て采配を振ってくれるとしたらナインは夢心地、勝負はそっちのけだろう。ヤマカズさんが新響を振ってくれる、これはまさにそれなのだ。しかも本番だけではない。合宿から日頃の練習にもたっぷり指導して頂ける。それもヤマカズさんにハマリのマーラーとあってはもうたまらない。これが実に９年も続いているのである。なぜヤマカズさんはこんなに長く新響を振って下さるのだろう？『アマにはプロにない情熱がある。アマは練習が多いからじっくり自分の音楽を作れる……、』皆さんよくこうおっしゃる。だけどこう言われて顔が赤くなるのは私だけではあるまい。確かに情熱はあるが決してプロのそれより上とは思えない。練習だって全員揃うことはめったにないし、終ってからの一杯が練習以上の楽しみで集まる連中だ。じっくり練習、といっても何しろさらってないから楽譜にくっつ

きっ放しで棒なぞ見るヒマなし、他のパートを聴き合う余裕なしなんだから。その上ヤマカズさんの棒は千変万化、頭のてっぺんから足の先まで全てを使って音楽を作り上げて行く。我々はただただ圧倒されながら必死でついて行こうとするが力及ばずおっこちてしまう。今はヤマカズさんのやりたいことの半分も実現できてないだろう。しかしヤマカズさんは常に変らない情熱と愛情で我々に接して下さる。なぜ……？だが今はなぜ？なんてもっともらしく考えるよりもそれにどうやって応えるかが我々にとって重要だ。これはどこまでヤマカズさんと同じ気持になって音楽が出来るか、にかかっている。頑張らなくちゃ。

マーラーシリーズもとうとう最後になってしまった。どうしてマーラーはたった10$\frac{1}{2}$曲しか交響曲を書かなかったのだろう。モーツァルト並に40曲位あれば、あと30年はヤマカズさんとシリーズを続けられたのに。『いやー君達、もうカンベンしてくれよ。』とヤマカズさんに言われてしまうかな。

（Vla. 岡本　明）

橋谷幸男君のこと

桜井　哲雄（新響オーボエ奏者）

4月24日、橋谷幸男君が亡くなりました。昨年脳出血で倒れてから11カ月の闘病生活の末、意識が戻ることも無くついに亡くなりました。40歳の誕生日を迎えたばかりでした。

酒好きの彼でした。人間好きの彼でした。だから、音楽の後は必ず飲み屋に繰り出しました。ほとんどは音楽の話でしたが、時には仲人まがいの世話話もしました。実際彼の努力でまとまった夫婦が数組有るのです。なにしろ彼は『人事の橋谷』でしたから。帰りは大体午前様でした。まわりの人に良くした分、身体のためには良くなかったのです。

新響は今まで大勢の人の力で育てられて来ましたが、彼はその中でも最も重要な一人でした。19年前に彼は入団しました。数年後に運営委員長になり、まず運営委員会が影響を受けました。オーケストラの運営は質量共に大変な仕事なのですが、このあたりから運営委員会としての形を調え始め、1986年4月のマーラーの千人の交響曲の成功へとつながって行くわけです。これは素晴しい演奏会でしたが、一番素晴しかったのは、橋谷君を中心とした運営委員会の仕事振り、と言う人も居た程です。

宴会係も彼の仕事でした。演奏会後の打ち上げ会、合宿の夜の大宴会、何でもないただの宴会、とにかく彼が司会をすると盛り上がるのです。眼鏡越しの笑顔のせいでもありましたが、やはり人徳。でも、彼自身はほとんど芸をしないのです。指名して次々とやらせるだけ。しかし、彼が居ることでまわりがいきいきして来るのです。

この、今日のマーラー・プログラムで、マーラー・シリーズを遂に完結しますが、これは、9年前、彼が『マーラーをやるべきだ』と頑張ってくれたのが始まりでした。指揮者に山田一雄先生をむかえてのこのシリーズは、新響の歴史にとっても重要な一頁で、新響が続く限り折にふれ語り継がれて行くことでしょう。そしてその時マーラー狂いだった彼も話に登場して酒の席を盛り上げてくれるのでしょう。

船橋の芝山団地集会場で行われた葬儀にはのべ1000人の人々が参列しました。長めに上げたお経も終わって、お説教の時間になっても、焼香は続きました。隣に住んでいた柳沢君が手向けの音楽をと、階段をかけあがって、橋谷君の引き出しからつかんできたカセットテープには、まるで選んだように、マーラーの交響曲第9番第4楽章が入っていました。彼の大好きだった曲です。

本日はこの曲を彼に捧げて演奏します。感謝と、友情と、悲しみと、それに、奥様と医者の言う事を聞かなかった事への少しばかりの怒りを込めて演奏します。奥様と3人の子供達に今日の演奏が少しでも力になればと願っています。

僕はといえば、この原稿を書きながらも、いまだに信じられない気持ちでいます。でも、今日この曲を演奏し終わった時、実感する事になるのかも知れません。

この、君の選んだ悲しかるべき別れの曲には、悲しみと言うよりは、むしろ、諦めに似た、なにかしら深くて大きい優しい気持ちがこもっています。君の、残された者への最後の言葉でしょうか。



橋谷幸男氏略歴

1948年1月東京生まれ。1969年9月新響入団。1970年3月早稲田大学第一政経学部卒業。1972年現運営委員会発足と同時に運営委員長に就任。運営委員長を5期、人事マネージャー、運営委員を計12年にわたって務め、現在の新響の運営組織、演奏会企画のあり方について指導的な役割りをはたす。1988年4月24日没。

打楽器セッティング図鑑《マーラー編》

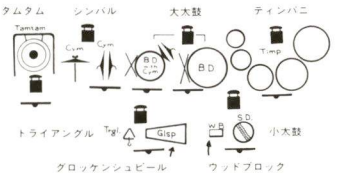
上原　誠(新響打楽器奏者)

交響曲第5番

ヨソの台所、ウチの台所

アメリカでは、オーケストラの打楽器セクションのことを〝キッチン〟と呼ぶ、ということを聞いたことがあります。なるほど、ティンパニは英語ではケトル・ドラム、ナベと呼ぶ人もいるし、台所を見れば、その家の事情がわかる、という訳ではありませんが、よく見ていると、効率的な手順や、思わぬ隠し味がみつかったりします。そんな訳で、続けてきた台所ウオッチングのメモも結構たまりました。まず、記号の説明を兼ねて、ウチの台所を紹介します。初めて山田一雄シェフをお迎えしての豪華メニューは、マーラーの交響曲第5番、これも初めてなので6人全員でやろう、というのがウチの事情でした。

山田一雄/新響(アマチュア)1979.12.1



大太鼓についてはスコアに「シンバルを固定して同時に1人で奏する」という意味の指示があり、40インチの他に、やや小さい楽器に16インチのシンバルを固定して使用。小太鼓の〝gedämpft〟という指示は、あまり考慮しなかったが、第1楽章「葬送行進曲」に出てくるので、黒い布を被せて叩くのが正解ではないかと、今は思っている。Holzklapper は普通のウッドブロックを使用。

ヨソの演奏の時は、休憩時間に置いてあるものを書き、演奏中に小物を書き加えているが、演奏中、手さぐりで書いて失敗したこともあります。

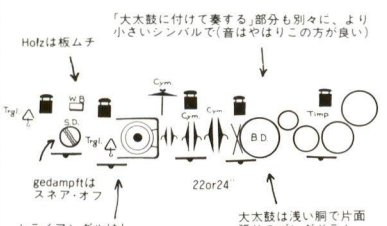
ショルティ/シカゴ　1986.3.26

追力に圧倒されたためか、この時のメモはわけがわからないので省略（1977.6.8の際の記録は無し)。でも終ってみて、〝オーディオマニアのための曲作りだった〟というのが実感でした。

シンバルは研修中の女の子を実習のために起用か(?)。アンコールのシンバルは別の奏者で、全く違う音を出していたのに。

外国のオケの紹介をしばらく続けます。

テンシュテット/ロンドンフィル 1984.4.6



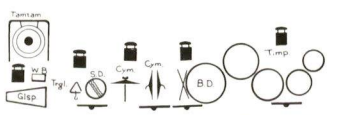
2楽章のシンバルに Höhepunkt （最高潮）という指示があり、特に大型の楽器が用意されている等、良い意味で演奏効果を充分考慮した配置だった。

バレンボイム/パリ管　1980.5.6



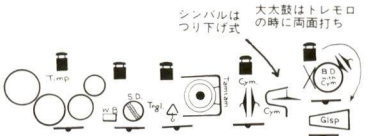
初めから完全な演奏をする気が無い為、かなり無理して3人で間に合わせていた。しばしば落ちては、顔を見合わせてニガ笑いをしたり、全く不愉快だった。

若杉　弘/ケルン放送響　1980.3.28



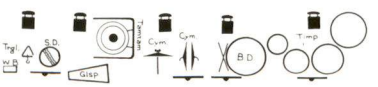
ドイツのオケだからティンパニの置き方が逆になる。

ノイマン/チェコフィル　1985.7.5



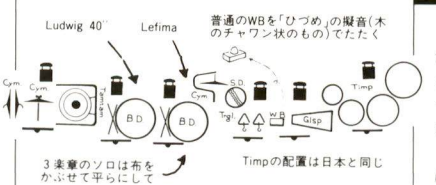
今までに聞いたことの無い別の版で、面喰った。(あきらかにつまらない。)

アバド/ロンドン響　1983.5.19



必要最小限の配置。

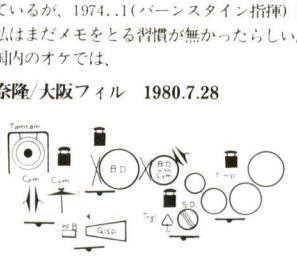
メータ/イスラエル・フィル　1983.3.16



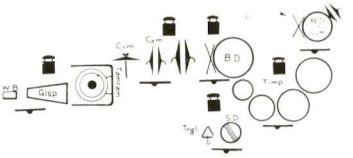
最も凝った配置だった。

この他、ニューヨーク・フィルは山台を置かず、最後列をフルに使っているので、おもしろい配置をしているが、1974..1(バーンスタイン指揮)当時の私はまだメモをとる習慣が無かったらしい。次に国内のオケでは、

朝比奈隆/大阪フィル　1980.7.28

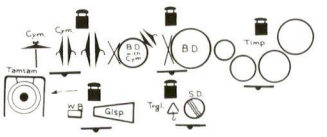


ベルティーニ/東京都響　1985.3.3



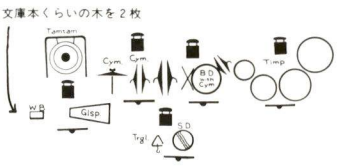
都響はいつも、楽器の配置・選定に充分な配慮が感じられて、大変参考になります。
ベルティーニの演奏は素晴しかった。

山田一雄/N響　1985.2.13



まあスタンダードという所か。

小澤征爾/新日本フィル　1986.5.7



新日フィルは、いつもどこか違う。

やはり外国のオケの方が、個性的というか、主張があるというか、時間に余裕があるというか、それぞれ特徴があります。

これらの配置の他に、シンバルの奏法をメモしたりして、つい聞く方が疎かになったり、逆に退屈しのぎになったりしています。でもこんなイヤなお客はウチには来てほしくない。

交響曲第3番

ウチの打楽器メンバーは現在7人、シロウトの悲しさで、各人の技術程度が揃っていない為か、また正直言って日頃からあまり気を配っていなかった為か、アンサンブルの悪さを指揮者から指摘されたり自覚したりしていました。

マーラーや邦人作品など、ほとんど毎回のように全員で演奏しているのに困ったものです。私なりに反省した結果、指揮者をよく見て、互いに目と耳で合わせあう為のより適切な楽器の配置を、練習の早い時期から皆で考えてゆく必要がある、というかなり基本的なことを疎かにしていたのに気がついた次第です。

そんな矢先、〝なるほど、これなんだ〟という見事なお手本を示してくれたのが、今年2月13日の**N響定期、ガリー・ベルティーニ指揮**のマーラーの交響曲第3番でした(図1)。

ベルティーニ氏は1985年都響に客演し、マーラーの2、5、9番を指揮し、5番しか聴けなかったのですが、それが大変良い演奏だったので楽しみにしていました。そして演奏もさることながら、その配置にも感心した次第です。

いつもの最後列の横いっぱいに広がる配置と異って、下手側の角部分にかなり緊密に固まっていた為、1階の私の席からは重なりあって良く見えず、あわてて3階まで上ってメモをとりました。

まず目をひくのが前後に大きく段差をつけたティンパニの1、2番で、これは1楽章と6楽章の最後のユニゾンを合わせる為にも大変良いアイデアです。パーカッションは限度ギリギリまで接近しているという感じ、1番や5番でも使われるシンバル付大太鼓は別の楽器を入れず、5楽章の最後で2人になるグロッケンシュピールも1台で仲良く演奏していました。また少年合唱（とはいってもいつも女の子の方が多い）と共に〝高い所で〟と指定のある〝音程のある鐘〟も中に配置されています。

2番、6番でも使われるRute（ムチ）は細い竹を束ねたような物で、大太鼓のフチをたたいていました。このRute(又はRuthe)は、本来は折檻のムチで、竹ヒゴなどで自作するとブイリ(ハワイあたりの民族楽器)やササラなどより、「らしい」音がします。私も模型屋でたぶん凧を作るためのものでしょう、長さ90センチのやや太い竹ヒゴを半分に切り、持つ部分に細くて短かい竹ヒゴを混ぜて束ねて作りました。こうすると先が広がって良い音になります。

遠方で演奏する様に指示された小太鼓は3人が出て行ったので、後でスコアを見たところ〝2～3人の〟という指示がありました。

つぎに比較の意味で同じ**N響での別の例**を御紹介します（**図2**．もちろん同じNHKホール）。

N響以外の国内オーケストラに移りますと

若杉　弘／都響（図3）

小太鼓が3台記録されていますが、ステージで3台も必要な所は無いと思いますが、もしかしたら〝遠方(普通は舞台裏が多い)〟の個所をステージ上でやったのかもしれない。当時私はこの曲をあまり良く知らなかったため特にコメントはありません。

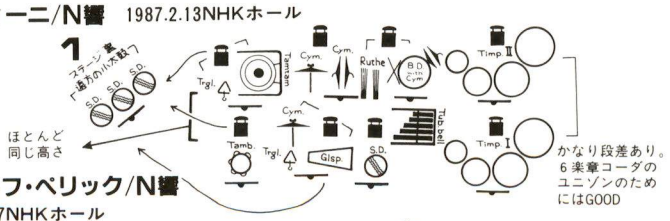
小沢征爾／新日本フィル（図4）

他とちがってティンパニを含めて7人でした。しかしタムタムを分散し、特に1楽章の最後77番の個所をタンブリン奏者が担当すれば可能です。タムタムとチャイムがどのように離れていたかは不明です。

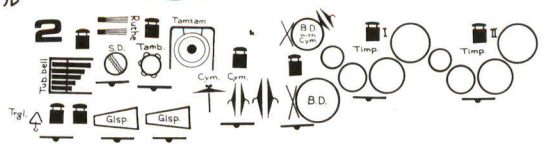
ブルゴス／読響（図5）

タンブリンはスタンドに付けて両手でたたいていたようです。

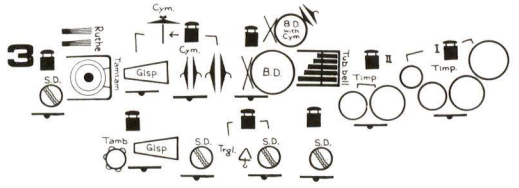
ベルティーニ/N響　1987.2.13NHKホール



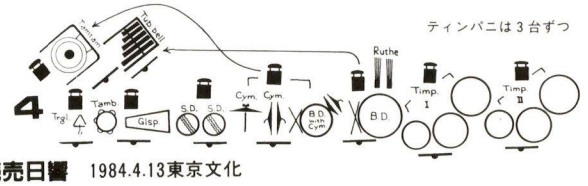
クリストフ・ペリック/N響
1982.10.6,7NHKホール



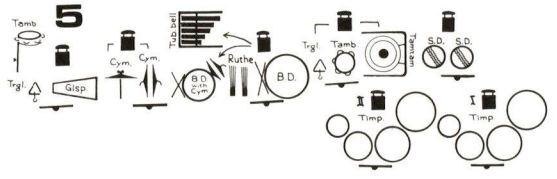
若杉　弘/都響　1979.7.12,13東京文化



小沢征爾/新日本フィル　1983.3.28東京文化



ブルゴス/読売日響　1984.4.13東京文化



＊「打楽器セッティング図鑑」は管楽器専門誌「パイパーズ」第67号および第68号に掲載されたものです。©PIPERS

グスタフ・マーラー　フィルハーモニア版
ミニアチュア・スコア

交響曲第一番 1300円
交響曲第二番 1500円
交響曲第三番 1800円
交響曲第四番 1400円
交響曲第五番 1800円
交響曲第六番 1800円
交響曲第七番 2000円
交響曲第八番 1700円
交響曲第九番 1400円
大地の歌 1100円
子どものI.1000円
不思議な角笛II. 950円
亡き子をしのぶ歌 700円
七つの歌 700円

音楽之友社
東京都新宿区神楽坂6-30
〒162　☎03(235)2111

好評発売中／重版出来！
異邦人マーラー
H.A.リー＝著／渡辺裕＝訳
「私には三重の意味で故郷がない」と自らを語ったマーラーの音楽の陰にひそむものを探る。 2400円

☆9月上旬ごろ発売予定
グスタフ・マーラー
隠されていた手紙
H・ブラウコプフ＝著／中河原理＝訳
17人に宛てた150通の書簡を網羅。 予価2400円

アマチュアオーケストラ

